

2015年7月12日 主日礼拝説教（要旨）

聖書 ルカによる福音書9章51～62節

説教 「神の国を目指して」

日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松牧人

「イエスは、天に上げられる時期が近づくと、エルサレムに向かう決意を固められた」（51節）とあります。天に上げられる時期とは、主イエスの苦難、死、復活、そして昇天の時です。「エルサレムに向かう決意を固められた」とは「顔をエルサレムへと固定された」と書いてあります。主イエスは、十字架に向かって覚悟を決めて歩み始められたのです。ルカによる福音書はここから19：27にかけてエルサレムに向かって旅する主イエスを描いています。

しかし、その冒頭に、出端をくじかれるようなこと、つまりサマリア人たちが自分たちの村を通る主イエス一行を歓迎しなかったということが書かれています。そのことに怒りを覚えた弟子のヤコブとヨハネが「彼らを焼き滅ぼしてしまいませんか」と感情をあらわにしましたが、主イエスは振り向いて二人を戒められました。弟子たちはここでも、主イエスが自分たちに聞き従おうとしない人々を、全能の力で裁いたり滅ぼしたりするような王となることを期待していたようです。もちろん、主イエス御自身にとって、サマリアの人々の拒絶や冷たい視線は快いはずはなく、どんなにつらい思いをされたことかと想像しますが、主イエスは、自分の身を守るために、奇跡を起こされるお方ではありませんでした。主イエスは今、私たちのまことの救い主となるためにエルサレムをめざし、苦難と十字架の道へと踏み込んでいかれるのである。

とても興味深いことに、主イエスのエルサレムへの旅物語を描く記事の中に、ルカはルカによる福音書独特の話として、あの有名な「善いサマリア人」の話（10：25～37）を置き、また重い皮膚病から癒された10人の内ただ一人、神を讃美しながら戻ってきて、主イエスに感謝したサマリア人のことを記しています（17：11～19）。さらに、同じルカが描く使徒言行録8章では、聖霊降臨の約束の成就として、フィリポによるサマリア伝道の成果が記されています。断固として十字架を引き受けて歩まれる主イエスのもとで、ユダヤとサマリアの間に横たわる隔ての壁も取り払われていく壮大な神の救いの御業をルカは認め、ほめたたえているのです。

主イエスが私たちの救い主となるために、エルサレムに向かって進む決意を固められたとすれば、この主イエスに従う私たちもまた、このお方にふさわしい服従を決断していかなければなりません。主イエスに出会い、主に従おうと願う3人の人たちに対する主イエスの断固たる招きの言葉が記されています。

まず、第一の人は、「あなたがおいでになる所なら、どこへでも従って参ります」（57節）と言います。この人に対して、主イエスは「狐には穴があり、空の鳥には巣がある。だが、人の子には枕する所もない」（58節）と言われました。主イエスに従うとは、自

分を捨て、日々、自分の十字架を背負って従って行くことです（9：23 以下）。安っぽい恵みを求めての信仰生活は長続きしないし、何らかの十字架を負うことなしに本当の喜びも経験することができません。主イエスは、大見得を切るようなことや、一時的な感情の高揚をお求めにはなりません。主イエスは、自らの罪と愚かさ、弱さを弁えつつ、忍耐強く御言葉に聞き従って生きる服従の道を私たちに求めておられます。

第二の人は、主イエスの召しを受けながら、まず父を葬りに行かせてくださいと猶予を求めています。これに対して、主イエスは「死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい。あなたは行って、神の国を言い広めなさい」（60 節）と言われました。ここで、死んでいる者たちとは、主の恵みを未だ知らず、主に従うことを知らない人たちのことであり、死者の葬りのことはその人たちに任せておいたらよいのではないと言われるのです。これはどういうことでしょうか。福音宣教のためなら親不孝でも薄情でもかまわないということでしょうか。そうではありません。しかし、世の中には葬儀のことやお墓のこと、死者や先祖に対するしきたりにこだわり、思い煩い、振り回されている人たちが少なくありません。けれども、あなたはそうしたこの世の営みを支配している悲しみや暗さを打ち破る希望を知っているのではないか、罪の赦しと永遠の生命に生きる幸いを知っているのではないか、主に委ねる信仰、死を超える希望はあなたでないと伝えられないのではないか、そのことこそまずなすべきことではないか、と主イエスと言われるのです。

最後に、第三の人は、「主よ、あなたに従います」と自発的に申し出ながら、そこに条件を付けて、「まず家族にいとまごいに行かせてください」と言っています。そういう人に対しても、主イエスは「鋤に手をかけてから後ろを顧みる者は、神の国にふさわしくない」（62 節）と言われました。神の国の事柄、信仰の決断は、家族と相談して決める事柄ではありません。また、家族がどんなに大事であり、良いものであったとしても、神の国の事柄はそれよりもさらに優先させるべきことであることを主イエスは告げておられるのです。鋤に手をかけて土を掘り起こすとき、途中でキョロキョロと後ろを振り返っているようではまっすぐにきれいに耕すことはできません。主イエスに出会い、主イエスの招きを受けたなら、このお方から目を離してはいけません。このお方のお姿を見失ってはいけません。パウロが語っているように、「後ろのものを忘れ、前のものに全身を向かって向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです」（フィリピ 3：13～14）。そこに私たちの信仰の大切な基本姿勢があります。